

逆接三分類と想定の強さ：*but, however, nevertheless* の意味的相違*

井筒（成田）美津子

1. はじめに

本稿では、*but, however, nevertheless* という三つの逆接表現の意味の違いについて取り扱う。これまでの語法研究では、これら三表現について、(1)に挙げたような言語使用域 (register) における違いがあると指摘されてきた。

- (1) a. 「連結副詞としての *however* は (BUT 「しかし」と同じように)、やはり対立を表す。その文体は《ややあらたまった》ものである。」
(Leech 1996: 253)
- b. “*However* and *nevertheless* emphasise the fact that the second point contrasts with the first. *Nevertheless* is very formal.”
(Swan 1995: 159)

以下では、*but, however, nevertheless* は、このような register における違い以外に、意味の上でも明確な違いがあることを次の二つの点から指摘する。まず、逆接の意味は大きく分けて、対照 (contrast)、譲歩 (concessive)、訂正 (corrective) の三つに分類され (Izutsu 1998, 2001)、三表現はこの三分類における分布の仕方が異なることを示す。さらに、三表現が共通して表すことが出来る譲歩の意味についても、これらの表現が全て等しく譲歩の意味を表す訳ではなく、譲歩の意味に関わる想定 (assumption) の因果関係の強さ (causal relatedness) に違いがあることを示す。

なお、(2)に示したように、三表現が共通して現れるのは、(2a)のような節頭位置に限られるので、以下の議論では、この節頭での用法のみを扱う¹。

- (2) a. He had no qualifications, but/however/nevertheless he got the job.
 b. The survey was on quite a small scale. It did, *but/however/nevertheless, provide a lot of useful information..
 c. They hadn't trained hard; they won, *but/ however/nevertheless.

2. 先行研究

2.1 Fraser (1998): The *but*, *however*, *nevertheless* hierarchy

始めに、これらの表現の意味の違いを指摘した二つの先行研究を概観する。まず、Fraser (1998) では、*but*, *however*, *nevertheless* という三表現は(3)に示したような階層を成し、*but* は最も広い意味、*nevertheless* は最も狭い意味を表すということが指摘されている。

- (3) *but* > *however* > *nevertheless*

Fraserはこの階層を、(4)に挙げたような三表現の置換関係によって示している。(4)の中で、*but* は(a)~(c)全ての文で許容されるのに対し、*however* は(a)と(b)、*nevertheless* は(a)の文でしか許容されない。

- (4) a. We started late. *But/However/Nevertheless* we arrived on time.
 b. John is tall. *But/However/??Nevertheless* Sam is short.
 c. A: Chris is enjoying being a bachelor.
 B: *But/??However/??Nevertheless* Chris is NOT a bachelor.

(Fraser 1998: 312, 313, 318)

Fraser によると、(3)に挙げた階層は、各表現が課す制約の違いによって説明されると述べている。つまり、(5)にまとめたように *but* は最も制約が弱く、「単純な対比 (simple contrast) を表すだけ」(p.309) で、*however* に関しては、「S1 (最初の要素) が強意的で、S2 (二番目の要素) が従属的な働きを担う」(p.313) とし、*nevertheless* については、「(他の二表現) より強い (狭い) 制約」(p.318) を課すと説明している。

- (5) a. “the core meaning of *but* is to signal simple contrast, nothing more”
(ibid.: 309, my emphasis)
- b. “the core meaning of *however* signals that S1 is being emphasized, placing the S2 message in a more subordinate role”
(ibid.: 313, my emphasis)
- c. “in contrast to *but* and *however*, which also may target an indirect message of S1, when the S1 message is implied, the restriction for *nevertheless* is narrower: the implication cannot be just any old implication; it must be expected” (ibid.: 318, my emphasis)

(3)に示した階層は、かなり妥当性の高い考察をしているものの、この階層に対する Fraser の説明には、いくつかの問題点がある。例えば、Fraser は、*but* について、「単純な対比 (simple contrast) を表すだけである」と述べているが、この「単純な対比」という概念そのものが明確にされていない。また、*however* についても「S1 が S2 より強意的 (emphatic) である」としているが、この「強意的」という表現が何を表すのかが明らかではない。もし仮に、この「強意的」という表現が何らかの認知的際立ちに対応する概念だと理解すると、Fraser の事実観察自体が不正確であるということになる。(6)や(7)に示すように、否定のテストを用いると、*however* は S1 より S2 の方がより際立ちの高い意味内容を表すと言える。

(6) X: The weather was absolutely dreadful. However, the children enjoyed themselves.

Y: a. No, they didn't. They said to me, "we want to go home."

b. ?No, it wasn't. The weather was not so bad.

(7) X: We thought the figures were correct. However, we have now discovered some errors.

Y: a. No, we didn't make any errors. The figures are not wrong.

b. ?No, the figures were not correct. We must count them again.

2.2 Blakemore (2000, 2002): The relevance-theoretic analysis of *but*, *however*, *nevertheless*

次に、Blakemore (2000, 2002) の研究を概観する。彼女も Fraser と同様、三表現は各表現が課す制約の数や種類に違いがあると考え、これらの制約を関連性理論の立場から説明している。(8)に挙げたのが Blakemore の制約である。

(8) The kinds of constraints on pragmatic inferences

but: (i) A CONSTRAINT ON COGNITIVE EFFECTS:

"the contradiction and elimination of an assumption"

however: (i) A CONSTRAINT ON COGNITIVE EFFECTS:

"the contradiction and elimination of an assumption"

(ii) A CONSTRAINT ON CONTEXTS:

"it (= *however*) restricts the recovery of this effect to contexts which include assumptions which carry a guarantee of relevance accepted by the speaker and whose cognitive effects do not include the elimina-

tion of A (an accessible assumption)” (Blakemore 2002: 122)

nevertheless: (i) A CONSTRAINT ON CONTEXTUAL EFFECTS:
“the contradiction and elimination of an assumption”

TWO CONSTRAINTS ON CONTEXTS

(ii) “it (= *nevertheless*) encodes the information that the utterance is relevant as an answer to a question whose relevance has been established in the preceding discourse”

(iii) “it encodes the information that these contextual effects are to be derived in a context which provides evidence for a contrary answer”

(2000: 481, my emphasis)

彼女の説明によると、三表現は全て、その認知効果を「最初の節から喚起される想定**の矛盾と削除**」に制約するという点では共通しているが、*however* と *nevertheless* に関しては、さらにこの認知効果が達成される文脈に対する制約があり、この制約の数が *however* では一つ、*nevertheless* では二つとその数に比例して各表現の許容範囲が狭くなると説明している。具体的には、例えば *nevertheless* は、「この語に続く発話が先行文脈で与えられた疑問に対する答えとして関連性があり、さらに直前の節が *nevertheless* 以下の節で提示される答えと反対の答えを支持するような内容を含む」(Blakemore 2000: 481) という二種類の文脈に対する制約を課すと述べている。

この *nevertheless* に関する Blakemore の主張を支持する例が(9)である。この(9)では、*nevertheless* 以下の発話は、Aが提示した質問(食べ物は足りるか?)に対する No の答え(食べ物は足りない)であることを文脈的に含意し、Bの前半の発話はそれとは反対の Yes の答え(食べ物は足りる)を含意する。従って、

この文脈では、Blakemore が示した二つの制約の両方を満たしているので、*nevertheless* は許容されると説明される。

(9) A: There's going to be quite a crowd tonight. Is there going to be enough food?

B: Well, there's lots of salad and bread, and plenty of cheese. *Nevertheless I think I might make another pizza.*

(Blakemore 2000: 480)

しかし、*nevertheless* が何らかの疑問を前提とするという Blakemore の制約は強すぎ、多くの *nevertheless* の実例を説明出来ない。(10)に示したように、何も疑問を前提としなくても、*nevertheless* は問題なく用いられる。(10)は、インターネットで配信されたニュースの冒頭部分で、*nevertheless* は本文 2 行目に現れている。この *nevertheless* は、先行文脈で与えられた疑問に対する答えを提示している訳ではなく、単に直前の文との逆接的關係を表している。

(10) The San Francisco-based company has been around six years and has never posted a profit. *Nevertheless, some analysts say this is a niche player that has the right ingredients in place to turn things around.*

(CNN.com September 18, 2003)

2.3 先行研究のまとめ

今見てきたように、二つの先行研究は、三表現の階層性について興味深い考察をしているものの、事実認識や用いられる概念が不正確な点がある。さらに、逆接の意味記述や分類が不十分なために、三表現が表す意味の違いについての統一的な説明が与えられていない。そこで、以下では、まずこれらの表現が、逆接の三分類において分布の仕方が異なることを示す。

3. *but, however, nevertheless* : 逆接の三分類における分布の違い

(1) に挙げたように、逆接の意味は大きく分けて、対照 (contrast) ・譲歩 (concessive) ・訂正 (corrective) の三つに分けられる (Izutsu 1998, 2001)。

- (1) a. John is tall, but Sam is short. [CONTRAST (対照)]
b. John_i is poor, but he_i is happy. [CONCESSIVE (譲歩)]
c. John isn't American but British. [CORRECTIVE (訂正)]

この(1)から分かるように、*but* はこれら三つの逆接的意味を全て表すことが出来る。これに対して、*however* は、対照と譲歩という二つの意味を表すことは出来るが、訂正の意味を表すことは出来ない。(12)に示すように、*however* は *but* と同様、二つの節の意味内容を比較・対照する文には問題なく現れることができ、さらに(13)に示すように対照を表す *in contrast* という表現と共起することも可能である。また、(14)のように、譲歩の意味を表す文にも、*however* は問題なく現れることが出来る。これに対して、(15)に示すように、訂正を表す文には *however* を用いることは出来ない²。

- (12) a. John is tall. But/However/#Nevertheless, Sam is short.
b. John gave toys to Mary. But/However/#Nevertheless, Sara gave dolls to Jane.
c. The cook fried the onions. But/However/#Nevertheless, she steamed the cabbage. (Fraser 1998: 310, 313, 318)

- (13) a. The number of Japanese traveling overseas reached 16.52 million in 2002 and continues to rise. But/However/??Nevertheless, in contrast, the number of foreign tourists visiting Japan in the

same year was less than one third or just 5.24 million.

(cf. *PR Newswire*, February 27, 2004)

- b. Americans unconsciously associate people who avoid eye contact as unfriendly, insecure, untruthworthy, inattentive and impersonal. But/However/??Nevertheless, in contrast, Japanese children are taught in school to direct their gaze at the region of their teacher's Adam's apple or tie knot and, as adults, Japanese lower their eyes when speaking to a superior, a gesture of respect.

(cf. *Communicating in Business* by Simon Sweeney)

- (14) a. John is poor. But/However/Nevertheless, he is happy.
b. John is a politician. But/However/Nevertheless, he is honest.
(Fraser 1998: 313)
c. We started late. But/However/Nevertheless, we arrived on time.
(ibid.)

- (15) a. John isn't American but/??however/??nevertheless British.
b. He is not clever but/??however/??nevertheless hardworking.
(Blakemore 2002: 117)

次に、*nevertheless* に関しては、譲歩の意味のみを表し、対照と訂正の意味を表すことは出来ない。具体的に見ていくと、*nevertheless* は、*but*, *however* 同様、(14)のような譲歩文に用いられることが出来るが、(12)のような二つの内容を比較・対照する文脈には現れず（正確にいうとこれらの文に用いられても対照の意味を表さなくなり）、(13)のように *in contrast* という表現と共起することも出来ない³。さらに、(15)に見られるように、訂正の意味を表すことも出来ない。

以上をまとめると、表1のようになる。*but* は、対照・譲歩・訂正という三つの意味を全て表すことが出来る。*however* は三つの逆接的意味のうち、対照と

表 1：逆接の三分類における分布の違い

	Contrast (対照)	Concessive (譲歩)	Corrective (訂正)
<i>but</i>	○	○	○
<i>however</i>	○	○	×
<i>nevertheless</i>	×	○	×

譲歩を表すことが出来るが、訂正を表すことが出来ない。*nevertheless* は譲歩の意味のみを表す。先程、Fraser (1998) が三つの接続表現には階層性があると述べているのを見たが、今見た逆接の三分類における分布の違いが、Fraser (1998) が指摘する階層性の要因の一つとして働いていると考えられる。

4. 譲歩の意味での相違

4.1 譲歩の概念構造

次に、三表現が共に表すことが出来る譲歩の意味の違いについて見ていくが、その前に、譲歩の意味について簡単に説明する。(16)に示したように、譲歩の意味は、最初の節の命題内容から喚起される想定 (assumption) と続く二番目の節の命題内容との対立関係を表す。例えば、図 2 に示したように、(17a) のような『ジョンは貧しいけれども幸せだ』という譲歩文の場合、(17b) に挙げた「ジョンが貧しいならば、普通幸せではないだろう」という最初の節から喚起される想定が関与し、この「ジョンは幸せではないだろう」という想定が二番目の節の「彼は幸せだ」という命題内容と対立関係にあると分析される。別の言い方をすると、譲歩文では二番目の節の命題内容と反対の想定が最初の節から喚起されると言える⁴。

- (16) CONCESSIVE：S1 から喚起される想定と S2 の命題内容との間に生じる対立関係 (Lakoff 1971, König 1994, Izutsu 1998 他)

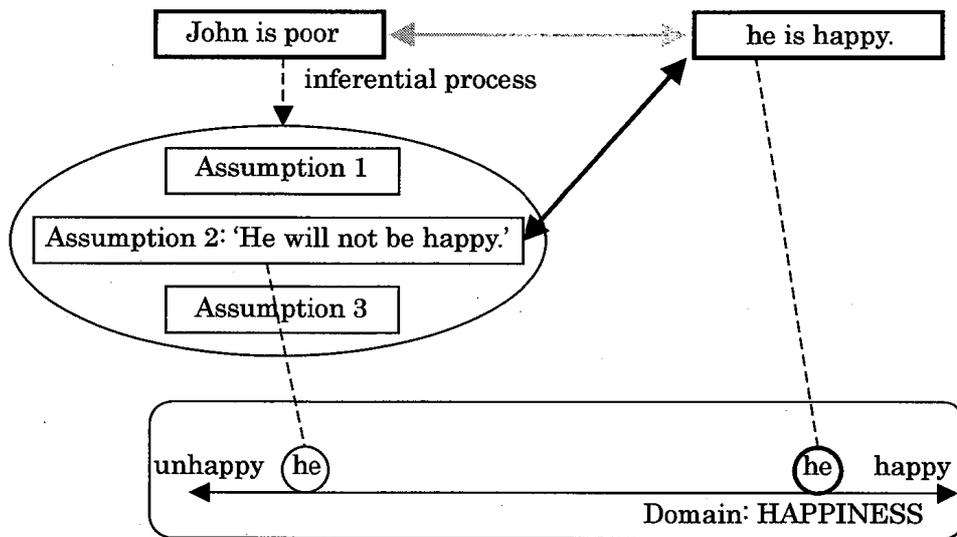


図 1 : CONCESSIVE の意味構造 (e.g., *John is poor, but he is happy.*)

- (17) a. *John is poor, but he is happy.* [S1, but S2.]
 b. 'If *John is poor*, (then normally) *he will not be happy.*'
 ['If S1, (then normally) not S2.'] (an assumption evoked)

4.2 想定 of 因果関係の強さ

譲歩の意味を表す *however* と *nevertheless* について、Fraser (1998) は大変興味深い考察をしている。

- (18) A: How is it that the man drowned?
 B: Well, we put a flotation device on him. *Nevertheless/However, it slipped off. (Fraser 1998: 319)

Fraser は、(18)の B の発話では *nevertheless* より *however* の方が好まれるとし、その理由として譲歩の意味に関わる想定(「浮き輪を付けたら、その浮き輪はずれないだろう」)が強く期待されないためであると説明している。ただし、例外として、想定が強く期待されるような文脈では、*nevertheless* も容認されると述べている。例えば、「浮き輪の安全性が何度もテストされ、この浮き輪を使う

ことが水難防止の最高の策だ」と言われているような文脈では、「(それだけテストされているのであれば) この浮き輪を使えば、滑り落ちたりすることはないだろう」という想定を容易に喚起することが出来、その結果 *nevertheless* も許容されるということである。この Fraser の考察から、譲歩の意味に関わる想定がどれだけ喚起され易いのかということが、*however* と *nevertheless* が表す譲歩の意味の違いではないかと考えられる。

今述べた「想定喚起のし易さ」は、譲歩の意味に関わる想定**の「因果関係の強さ (causal relatedness)」**という点から捉えることが出来る。つまり、(19)に示したように、「浮き輪を付けた」ということと「浮き輪が外れない」ということは、あまり強い因果関係にあるとは言えない(破線矢印)。しかし、これに「安全性がテストされている」という情報が与えられると、両者の出来事はより強い因果関係で結ばれることになる(実線矢印)。つまり、「浮き輪を付けた。その浮き輪の安全性がテストされているなら、それは外れることはないだろう」と理解することが出来るわけである。

(19) 弱い因果関係：

「浮き輪を付けた」 -----> 「浮き輪は外れないだろう」

強い因果関係：

「浮き輪を付けた」 $\xrightarrow{\text{安全性がテストされている}}$ 「浮き輪は外れないだろう」

このことから、(18)の *however* と *nevertheless* の容認度の違いは、想定**の因果関係が弱い**文脈では、*however* だけが許容され、因果関係が強化されると *nevertheless* も許容されると考えることが出来る。

このように譲歩を表す接続表現の中には、想定**の因果関係の強さ**という点で何らかの違いを示すものがあるとすると、三表現の譲歩の意味の違いについても、(20)のようなことが予想される。

(20) 譲歩の意味を表す *but, however, nevertheless* は、「想定 (If S1, then

normally not S2.）の因果関係の強さ」（即ち、S1 と not S2 との間の因果関係の強さ）という点で異なる。

(20)の仮説を検証するために、因果関係の強さの段階性を示した Myers et al. (1987)の実験データを基に譲歩文を作り、その容認度を調べた。彼らの実験は、4つのレベルの因果関係を示す文を作り、被験者に1から7まで因果関係の強さに応じて点数を付けてもらうというものである。今回使用したデータを(21)に挙げた。

- | | |
|--|--------|
| (21) a. Sentence 1 (Cause): | Rating |
| Level 1 - Jane did poorly in her first test in English. | (5.56) |
| Level 2 - Jane skipped her English class every now and then. | (4.78) |
| Level 3 - Jane found her math class too tedious for her. | (4.34) |
| Level 4 - Jane enrolled in an English course this semester. | (2.50) |
| Sentence 2 (Result): | |
| All levels - She began to worry about her final exam. | |
| b. Sentence 1 (Cause): | Rating |
| Level 1 - Cleo tipped over a crystal vase on the table. | (6.39) |
| Level 2 - Cleo brushed against the table with a vase on it. | (4.85) |
| Level 3 - Cleo put roses in a crystal vase on the table. | (2.75) |
| Level 4 - Cleo arranged flowers on the table for dinner. | (2.39) |
| Sentence 2 (Result): | |
| All levels - The water spilled on the expensive carpet. | |
| c. Sentence 1 (Cause): | Rating |
| Level 1 - A strong night wind came in the open window. | (6.68) |

逆接三分類と想定の強さ： *but, however, nevertheless* の意味的相違 (井筒 (成田) 美津子)

Level 2 - A large window was opened to air the room. (5.59)

Level 3 - The rain storm was approaching the city. (2.84)

Level 4 - The grey cloud hung heavily in the sky. (2.28)

Sentence 2 (Result):

All levels - The papers on the desk blew off onto the floor.

(from Myers et al. 1987: 462)

Myers et al.は、これらのデータを用い、Sentence 1 の4つのレベルの文が、結果を表すSentence 2の文に対して、どれだけ強い因果関係にあるかを調べた。そして、被験者が与えた得点の平均から、各組ともLevel 1が最も強く、Level 4が最も弱い因果関係にあるという結果を示した。

本研究では、このような異なる強さの因果関係を示すMyers et al.のデータの一部を利用し、譲歩文を作った。上で見たように、譲歩文にはS2の命題内容と対立する想定が関与し、この想定は何らかの因果関係を成す。このことから、因果関係の強さの違いを示すMyers et al.のデータのSentence 2を否定することによって、想定 of 因果関係の強さが異なる四種類の譲歩文を作ること出来る。このようにして作った譲歩文が(22)である。

(22) a. Level 1: Jane did poorly in her first test in English. Nevertheless/
However/But she didn't worry about her final exam.

Level 2: Jane skipped her English class every now and then. Never-
theless/However/But she didn't worry about her final
exam.

Level 3: Jane found her math class too tedious. ?Nevertheless/
?However/But she didn't worry about her final exam.

Level 4: Jane enrolled in an English course this semester. ?Neverthe-
less/?However/(?)But she didn't worry about her final
exam.

b. Level 1: Cleo tipped over a crystal vase on the table. Nevertheless/However/But the water didn't spill on the expensive carpet.

Level 2: Cleo brushed against the table with a vase on it. ?Nevertheless/However/But the water didn't spill on the expensive carpet.

Level 3: Cleo put roses in a crystal vase on the table. ??Nevertheless/??However/?But the water didn't spill on the expensive carpet.

Level 4: Cleo arranged flowers on the table for dinner. ??Nevertheless/??However/??But the water didn't spill on the expensive carpet.

c. Level 1: A strong night wind came through the open window. Nevertheless/However/But the papers on the desk didn't blow off onto the floor.

Level 2: A large window was opened to air the room. ?Nevertheless/?However/But the papers on the desk didn't blow off onto the floor.

Level 3: The rain storm was approaching the city. ??Nevertheless/??However/??But the papers on the desk didn't blow off onto the floor.

Level 4: The grey cloud hung heavily in the sky. ??Nevertheless/??However/??But the papers on the desk didn't blow off onto the floor.

これらの譲歩文に *but*, *however*, *nevertheless* の三表現を用いて見ると、各表現の容認度と想定の原因関係の強さとの間に一定の相関関係が見られる。(22

a) から (22c) の Level 1 の文では、三表現全てが許容される。例えば、(22b) の Level 1 は、「花瓶をひっくり返せば、水がこぼれるだろう」という当然予想される想定に対して、実際には「こぼれなかった」ということを表している。この Level 1 で関与する想定は、Myers et al.の実験では、4つのレベルのうち最も強い因果関係にあると判断されたものである。このように、想定が最も強い因果関係にある Level 1 においては、三表現は三組全ての例において許容される

次に、Level 2 では、三組の容認度が異なる。(22a)では、三表現全てが許容されるが、(22b)では *nevertheless*、(22c)では *however* と *nevertheless* の容認度がやや下がる。Level 3 になると、各表現の容認度がさらに下がり、(22a)の *but* だけが容認される。最後に Level 4 では、基本的に三表現全てが容認されないが、(22a)の Level 4 に関しては、*but* の容認度がやや高い。これは、例えば「ジェーンは英語が苦手だ」ということを話者が既に知っているような文脈では、「ジェーンが英語のコースに入ると、(彼女は英語が苦手なので) 期末試験について心配するだろう」という想定を何とか喚起することが出来るので、*but* は許容されるようになる⁵。

以上をまとめると、表 2 のようになる。つまり、*but, however, nevertheless* の譲歩の意味は、想定**の因果関係の強さ**と含意的階層関係 (implicational hierarchy) にあると理解出来る。

(23) 譲歩の意味を表す *but, however, nevertheless* の違い

the causal relatedness of an assumption ('If S1, then normally not S2.')

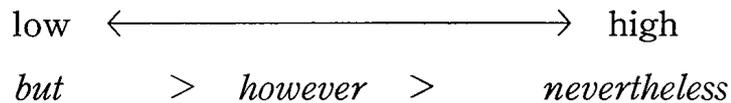


表 2 : The causal-relatedness hierarchy

表 2 は、含意的階層関係 (implicational hierarchy) を表すので、各表現は、それが位置する場所及びその場所から右側に示される因果関係**の強さ**の範囲内

で許容されることを意味する。つまり、*nevertheless* は前提となる想定のカラ関係が強い時にしか用いられず、*but* は想定のカラ関係が低くても許容され、*however* に関しては少なくとも他の二表現の中間くらいのカラ関係の強さが必要であるということである。

5. まとめ

以上、本稿では、*but*, *however*, *nevertheless* という三つの逆接表現の意味の違いを次の二点から説明した。まず、これらの表現は、対照 (contrast)、譲歩 (concessive)、訂正 (corrective) という三つの逆接的意味における分布の仕方が異なることを示した。つまり、*but* はこれら三つの意味を全て表し、*however* は対照と譲歩、*nevertheless* に関しては、譲歩の意味しか表せないということを明らかにした。さらに、三表現に共通する譲歩の意味についても、前提となる想定のカラ関係の強さに違いがあることを明らかにした。具体的には、三表現の譲歩の意味は、想定のカラ関係の強さと含意的階層関係 (implicational hierarchy) にあり、*nevertheless* は想定のカラ関係が最も強い時にしか用いられず、*but* はカラ関係が弱い場合でも許容され、*however* は少なくとも他の二表現の中間くらいのカラ関係の強さが必要であることを示した。

このように本研究での分析は、先程見た Fraser の *but* > *however* > *nevertheless* の階層性が妥当であることを、「逆接の三分類における分布の違い」と「譲歩の意味に関わる想定のカラ関係の強さの違い」という二点から具体的に示したと言える。その上、先行研究では場当たりのにしか説明されてこなかった三表現の意味の違いについても、今述べた二つの点から統一的な説明を与えることが出来たと思われる。

注

*本稿は日本英文学会北海道支部第49回大会(2004年10月2日、於北星学園

大学)での口頭発表に加筆、修正したものである。発表の際に、参加者の方々から頂いた助言に謝意を表したい。また、発表原稿の草稿段階でご指導下さった高橋英光先生、及びインフォーマントとして協力して下さった Randy L. Evans、Thomas Jacques、Alan Bossaer の三氏にも感謝を申し上げたい。なお、本稿に不備が見出されるとすれば、それは全て著者の責任であることを申し添えておく。

- 1 なお、アイルランド英語やオーストラリア英語では、略式で *but* が文末に来ることがある。(i) では、*but* は *all the same* や *nevertheless* の意味を表す。

(i) I didn't do it, but. (Quirk et al. 1985: 644)

- 2 (15)が許容されないのは、*however* が等位接続詞ではないからであると考えられる人がいるかもしれないが、*however* には等位接続詞的性質が無いわけではない。(i)のような文では *however* は等位接続詞的に振舞っている。この文で *however* は統語上等しい二つの要素（形容詞）を接続している。

(i) It was nice, however, expensive for the size and type of room.

また、接続副詞が許される環境でも、*however* は訂正の意味を表すことが出来ない。(ii)のように、訂正 (corrective) の意味は、*instead* などの接続副詞を使うと、二つの完全な節を用いて表すことが出来るが、(iii)のように、この種の文に *however* を入れると、もはや訂正の意味を表さず、譲歩の意味になってしまう。(iv)に示したように、同様の説明は *nevertheless* にも当てはまる。

(ii) He is not clever. Instead, he is hardworking.

(iii) He is not clever. However, he is hardworking.

(iv) He is not clever. Nevertheless, he is hardworking.

3 (12)の#は、*nevertheless* が意図された意味（対照の意味）で許容されないことを示す。(12)の各文に *nevertheless* を用いると譲歩の意味を表すようになる。

4 本研究でいう譲歩文とは多くの逆接研究で Direct contrast (Winter and Rimon 1994)、Direct-rejection concessivity (Azar 1997)、Direct concessive (Izutsu 2001) などと呼ばれているものを指す。これらの研究で指摘されているように、譲歩文には、(16)に示したような命題内容と想定が対立関係にあるもの以外に、二つの想定が対立関係にある Indirect concessive (又は Indirect contrast、Indirect-rejection concessivity) などと呼ばれるものもある。三つの逆接表現が後者の譲歩の意味においてどのような意味の違いがあるかどうかについては、今後の研究の課題としたい。但し、Winter and Rimon (1994: 369) が指摘する「*but* はこれら二種類の譲歩の意味両方を表すことができるが、*nevertheless* は前者のみである」という考察は明らかに誤りである。*nevertheless* も *but* と同様、Indirect concessive の意味でも用いられる。以下がその例である。

The Arab oil embargo did indeed cause a “hiccup” on the demand graph; consumer interest in small cars jumped out but then slid back. But only when the fuel economy standards were enacted in 1975 did a comprehensive approach to downsizing begin. *In the post-embargo period, the car companies were convinced (probably rightly so) that consumers were still primarily interested in large cars. Nevertheless, they were confronted with the government standards.* Downsizing was the way out; accommodate consumer demand for large cars and meet the early government standards that weren’t all that tough. (New Yorker, August 10, 2003)

この文脈では、斜字体部分の二つの節はそれぞれ「自動車製造会社は車の小型化を行わないであろう」と「車の小型化を行うであろう」という互いに対立する想定を喚起する。

- 5 (22)の三組の例では、同一レベルであっても容認度が異なる。(22b) と (22c) は、(22a) より三表現の容認度が全般的に低くなっている。この容認度の違いには因果関係の種類の違い (物理的因果関係と心的因果関係) が関与しているのではないかと思われる。(22b) と (22c) は、(22a) と違い、物理的な因果関係 (a physical causal relation) から成る想定に基づいている。一般的に、ある出来事 (例えば、22c のような「紙が床に飛び散ること」) が物理的に生じたと理解するには、それを直接的に引き起こす要因が明確に提示されなければいけない。例えば、(22c) の level 3 や level 4 のように、単に「暴風雨が近づいている」とか「灰色の雲が重くのしかかっている」という出来事だけでは、「紙が床に飛び散る」という出来事が起こったと確信することは難しい。なぜなら、暴風が近づいてきても、灰色の雲が重くのしかかっても、問題となる窓に風が吹き込まなければ、紙が飛び散ることはないからである。従って、「紙が床に飛び散った」と理解するには、少なくとも「風が窓から入ってきた」など「風」に関する何らかの言及が必要である (p.c., Randy L. Evans)。これに対し、(22a) のような譲歩文は、今述べたような物理的因果関係に基づく想定ではなく、むしろ「期末試験について心配する」という精神的不安を結果としてもたらす心的な因果関係 (a mental causal relation) が関与する。心的因果関係は、物理的因果関係よりも、さまざま想像を加えることによって、比較的柔軟に確立することが出来る。(22) の場合、「最初の試験で上手く行かなかった」という出来事以外にも、「時折授業をサボっていた」とか「授業が退屈に感じられた」などの出来事でも「試験について心配する」要因として考えることが出来るし、本文中で述べたように、「英語のコースに入った」という、かなり関係が弱いと思われる出来事でも、「ジェーンは英語が苦手なのだろう」などという想像を加えることによって、「期末試

験について心配する」要因として考えることが出来るようになる。

参考文献

- Azar, Moshe. 1997. Concession relations as argumentation. *Text* 17(3): 301-316.
- Blakemore, Diane. 2000. Indicators and procedures: *nevertheless* and *but*. *Journal of Linguistics* 36: 463-486.
- Blakemore, Diane. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge: CUP.
- Fraser, Bruce. 1998. Contrastive Discourse Markers in English. In Andreas H. Jucker and Yael Ziv (eds.) *Discourse Markers: Descriptions and Theory*, pp. 301-326.
- Izutsu, Mitsuko N. 1998. Semantic characterization of contrast and concessive: their commonality and difference. *Hokkaido Eigo Eibungaku* 43: 59-72.
- Izutsu, Mitsuko N. 2001. Contrast, concessive, and corrective: their semantic relationships. *Journal of Hokkaido Linguistics* 2: 19-33.
- König, Ekkehard. 1994. Concessive clauses. In R. E. Asher (ed.) *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Oxford: Pergamon Press.
- Lakoff, Robin. 1971. If's And's and But's about conjunctions. In C. J. Fillmore and D. T. Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, pp.114-149. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Leech, Geoffrey. 1996. 『ネイティブ英語運用辞典』 東京：マクミランランゲージハウス。
- Myers, Jerome L., Makiko Shinjo and Susan A Duffy. 1987. Degree of Causal Relatedness and Memory, *Journal of Memory and Language* 26, 453-465.

逆接三分類と想定の強さ： *but, however, nevertheless* の意味的相違 (井筒 (成田) 美津子)

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik.

1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Swan, Michael. 1995. *Practical English Usage* (2nd edition). Oxford: OUP.

Winter, Yoad and Mori Rimon. 1994. Contrast and implication in natural language. *Journal of Semantics* 11: 365-406.